

質疑応答



【司会】ありがとうございます。ここで、2つの講演についてご質問をお受けしたいと思います。どなたか、挙手の上、ご質問ください。

【島袋村長】伊江村の島袋です。能登局長の講演を聴いて、今後の離島において、ICTの進展によっていろいろな未来に向けて大きな期待を寄せているところでもあります。今後、私が思っている、離島で高校がない島でできるような、島にいなから、例えば伊江島で高校の授業を受けたいというような感じの、高校がない離島、町村ですか、離島で連携するような感じのその辺の構想的な部分は、国のほうで何かそういうような方向性は、現在のところ、そういう考えはなかったのでしょうか。その辺の部分のちよつとした走りでもいいんですが、あるのかどうなのか、ちよつと聞かせていただければありがたいなと思います。

【能登局長】ありがとうございます。離島での高校の授業ができるかどうかといえますのは、私のプレゼンテーションの中でもありましたけれども、今年度、与那国町で実験をしております。技術的にちゃんと可能かどうかということと、授業を受けた生徒と先生方がちゃんと授業として成り立つのかどうかということを実験しております。

夏休みという限られた期間ではありますけれども、おかげさまで、技術が進歩したということもありますし、それから通信会社のほうでもいろいろご協力いただいて、最新の機材、技術を使えばできるだろうということが見えてきております。それを受けて、琉球大学のほうでも検討委員会が開かれまして、報告書が取りまとめられているところです。

今日、実は、琉球大学の先生方にもお越しいただければということでお声掛けしたのですけれども、他の用事とかありまして、今日、残念ながら参加頂くことはできなかつたのですけども。ただ、このような報告を受けて、これからどういった発展があるのかというところが検討されていくのかなと思っております。

一つの方向性として、与那国の実証実験については、今年度、来年度、再来年度と3年続くという事になっております。今後、与那国だけではなくて、他の離島でもそういったことができないかということに関係される方々とお話を進めていって、実現可能性が本当にあるのかというところを確かめていくということかなと考えております。いずれにいたしましても、多くの方々のご協力なしにはできない事業ですので、関係される方々のご協力とご理解いただきながら進めてやっていければなと思っております。

【司会】大越先生、お願いします。

【大越校長】私のほうからは、今まで、学校の概要を中心に話ししました。かつては海外との同時授業形態というのは非常にコストがかかったのです。今は、生徒1人当たりに1,000円ぐらいのコストで授業ができるのです。そういう意味では、かつて莫大なお金をかけないとできなかったことが、今のツールやソフトを使うことによつて、コストも下がってきています。

全ての授業を変えるのが良いのかどうかは、これはまた教育上の問題もあります。基本的には、離島でも、指導する先生がいた上で遠隔授業を行い、現場でのサポートは、その先生がしていく。そして、現場の先生と異なる専門領域については、遠隔授業配信側の先生と離島の先生とのコミュニケーションやサポートをしつつ実施してゆく体制は、維持する必要があると思います。やはり、教師を配置せず、生徒だけで遠隔授業を行うというのは現実的ではないでしょう。4人、5人しかいないクラスであっても、そこには1人の先生を配置していただいて、授業のサポートに当たりながら遠隔授業を導入してゆくというのが、現実に即した形ではないかなと思います。離島という限られた人間関係の中でしか授業が進まないという現状にあつて、それよりも幅広い授業を受ける機会を提供し、より刺激を受けながら離島の生徒たちが育っていく。ICT技術を活かした教育とい

うのは、離島教育改善に向けた有効な手段ではないかなと感じています。

【能登局長】今の太越先生からのご指摘いただいた点は非常に重要なポイントだと思っています。実際、一括交付金を使った遠隔学習塾については、これは成果も結構上がってきているのですけれども、離島のほうで生徒だけがやっているというのは、これはやはり不可能です。ちゃんとアシスタントの方がいて、生徒の様子とか、そういったものをちゃんとケアしているということだそうなんです。

それから面白いのは、離島での教室なのですけれども、放課後の学校を使うというのが一番簡単なのですけれども、ただ、あえてそれはやめようということになっているのです。といいますのも、やっぱり気分を変えろということが大事なので、学校とは違う環境で教室に移ってもらって、そこで塾の授業を受けろということをやってらっしゃるそうです。ですので、ネットを使えば家でも授業は受けることはできるのですけれども、ただ、そうではなくて、ある程度生徒が集まって、通常の教室とあまり違いのないような形でやるというのも、一つのポイントだなと思っています。

【司会】どうもありがとうございます。皆さん、他にご質問は。

【上江洲部長】南西地域産業活性化のセンターの上江洲と申します。本日は能登先生、並びに大越先生には大変貴重なご講話を賜り、誠にありがとうございます。

両先生にお伺い致します。離島問題を考える上で、教育の問題もさることながら雇用の問題も挙げられます。学校は島外に出て行く。そして修学後は働く場がないから島に戻れない。それでどんどん人口が減っていくという悪循環があります。

他方で最近の動きとしまして、ICTを活用したテレワーク、遠隔地域でも働けるような形の仕組みが作られようとしております。

そこで、ICT教育と連動する形で、テレワークも含めた総合的な離島活性化の取り組みもされているのかどうか、お聞かせください。

【能登局長】ご質問、ありがとうございます。テレワークは、今、働き方改革の中でも推進されております。私どものほうでも、テレワーク普及というのもこれからやっつけていこうとしているところです。おっしゃる通りで、ICTを使えば、何も会社に行って仕事をする必要はなくて、どこにいても実際仕事もできるような環境ができつつあります。そういった意味で、離島で働くということの、一つの大きな力になっていくのかなと思います。それから、先ほど講演の中で、奥尻島の事例をちよつと紹

介させていただきましたけれども、なぜ奥尻高校でプログラミングを始めたかというのは、プログラミングとか、そういったIT関係の仕事であれば、離島でも仕事ができるじゃないかということが大きな根っこにあったそうなのです。ですので、IT、ネット環境、今のものを使えば、全く時間と距離を超越していろんな活動ができるようになってきています。これから、どんどんこういった技術が進めば、離島であるということも特に意識をしなくても生活できるようになってくるのかなと思っています。

【大越校長】このテレワーク的な、離島での職業の問題というのは、ご指摘の通りです。高校を卒業し、あるいは大学までICTで修了したのに、それに適した仕事があるのかどうかという問題は、一番大きな社会的な課題なのだと思います。結局、自分のふるさとに戻れない。やはり職業選択の幅がないことは、重要な問題かなと思います。これから大事なことは、離島の中で何か企業的なものを、ベンチャー的に作っていけるのかどうか。あるいは、島の特産品をどう売り出していくか。ICTの普及でかつてローカルな地域にしかなかったものが、全国規模の市場になっていく可能性は大きい。高知県に馬路村があるのですけども、地元のユズを使った調味料は、ローカルな物だったのがメジャーになっている。離島の特産物をどう商品化して、ローカルなものから全国規模に販路拡大を試み

るのも一つ大事なことです。先ほども話が出ましたコンピューターのソフトウェアの開発などは自宅でもできます。それ以外の業務を請け負う形でも、テクニカルには起業できると思います。それをどう島で立ち上げたり、誘致していくかは、やはり行政の力も借りながらやっついていかないと、仕事として取り込んでいくのは難しいと思います。

実は、私はまだ大学の業務も半分やっついていまして、全国の大学の就職問題を扱う委員会の委員もやっっています。そこでも、地方大学の出身者が、地元での就職を、希望してもそこに仕事がない問題は、この離島の問題と同じ構造です。帰りたけれど仕事がない。一番そこには、地方が仕事をそこに作っついていかないと問題は解決しません。人口の規模が問題ではなくて、いわゆる仕事や産業なりをどう確立していくかが大事なのだと思います。離島のことに限って言えば、離島の中で商品化できる部分はどれだけあるのか。そこにあるものをどうローカルなものから全国規模に売り出していくのか。ICTを使うとうまくいくのではないかと思います。

例えば、小さなコミュニティーで歌を歌っていたグループが、ネットに投稿したらそれがメジャーになつてしまう。非常に短期間でそういうことが起こりうるのです。ICTの時代だからこそ可能で、昔だったらできなかつたことだと思ふのです。東京出てきて売り出さないと売れなかつた。今はネット上に誰かが投稿しただけでバーツと拡散してしまう時代です。地場産業をどう発掘して、育成し

ながら、それを起爆にして、関連した産業に発展させていくかが大事なのかと、思います。

【司会】他にご質問等、意見等もありましたら、お願いいたします。

【太田さん】太田と申します。ICTの普及つていうのは、離島にとっては鬼に金棒の金棒じゃないかなと思つています。

知識とか技術、そういったものをICTで補うことができれば、離島においても東京と変わらない情報も得られるし、知識も習得できます。だから、離島で高等教育ができるのではないか、という話になつていふのだと思います。でも、それだけでは離島に来るインセンティブはないし、離島の若者の都市部への流出に歯止めをかけることも難しいと思います。

離島においても東京と変わらない情報が得られ、知識も習得でき、かつ、それにプラスして離島などどでしか得られない何らかの学びがあれば、離島留学など、人が離島に移り住む可能性が高くなるのではないかと思います。その学びは何かというと、それは「人間力」じゃないかと思います。

今、一部の島で離島留学などが行われて、都市部から離島留学に来る子どもたちも一定数いるやに承知しています。なぜ、わざわざ離島に行くのか。その誘因力というのは離島などが有する

「人を育てる力」ではないかと私は思っています。

その例は伊江島の民泊です。この民泊で学校自体が変わったという話があるのです。やんちゃな学校が今や進学校に変わったとか。民泊を体験した子どもたちが、たかだか1日の伊江島の滞在で人間が変わるくらいの衝撃な体験ができる。つまり人間力がガーツと伸びるっていうことが、もう既に民泊で実証されていると思うのです。

東京とか大阪とか、都市部で、こんなこと絶対起きないと思っっています。離島で高等教育を施すというのは、15の春を防止するとか、18の春を防止するとか、それはそれで結構ですけども、それ以上に、東京とか、都市部の子どもたちを離島に来てもらってそこに住んでもらう。住んでもらうて、厳しい自然環境と共生していく。あるいは、地域みんなが助け合って生きていくという知恵、これらを学ぶ。それで、なおかつICTで最先端の知識、技能を吸収する。そうすると、知識も技能も最先端で、なおかつ人間力がある人が育つでしょう、ということなのです。だから、離島に高等教育、ICTを使った高等教育機関を置けば、すごく面白いことになるのではないでしょうかとというふうに、私は思っているのですけど。そのことについて、大越先生とか、お聞きしたいと思えます。

【大越校長】ご指摘、ありがとうございます。実は、本校でも同じようなことを実施しております。

今、中学生から食育教育をやっております。まず中学2年生の時に、夏休みに入ると長野県飯田市の農村に連れていきます。そこで3泊4日で農村の体験をします。それと同時に、学校の菜園で畑を耕してサツマイモを作ったりさせます。そうすると、店頭に並んでいる芋類はきれいに洗った芋です。しかし、畑の中で草を取ったりしながら育てると形もふぞろいな物がたくさん出てくる。同じような物がなかなか出てこないというのも体験します。生徒たちが農村に行つて何に感動するか。夜、周りが真っ暗だとこんなに星が見えるのだという体験を、初めてするのです。都会にいると夜空が明るいから。光のない山間部に行つて星が良く見える事が分かる。

中学3年生になると、彼らをオーストラリアに連れていきます。日本の飯田市辺りの山間部の棚田のような狭い所で農業をしている。それがオーストラリアへ行つた時、1つの農家に3人ぐらいで4日間分宿させます。その時に何を彼らが一番驚くか、水がどれほど貴重なのかということ。 「シャワーは3分間で終えなさい」と農家の人に言われる。今、温暖化が進んでいて、オーストラリアでは、水が足りないのです。大きなタンクを作つて雨水をためて、それを使つて利用している。それがなくなると水を買つてくるという。

日本は、水が豊富ですから、水道を出しっぱなしでも使える。シャワーはジャージャー流しながら10分でも15分でも、女の子なんかは浴びている。初めて、水が貴重なのだということを経験す

る。広大な農業をやっているオーストラリアで、やはり、水が足りないと作物が育たない。牧畜のよ
うに、あんまり水を要さないものしかできない部分もあることを学んでくるのです。

先ほどお話があった離島の体験もおっしゃるとおりだと思います。桜美林高校は、沖縄に平和
学習で来る時に、10年前ぐらいは、離島へ行くプログラムを組んでいました。その島へ行ってびっく
りするの、信号機が一つもないっていうようなことも体験する。「あ、こんな所があるのだ」って。
なぜ離島へ行くプログラムがなくなってしまったかという、天候に左右されて船が欠航してしまう。
スケジュールの調整が困難になってしまうことがあって、やむなくやめた経験があるのです。やはり
おっしゃるように、離島での体験というのは、自然の中で、不便かも分からないけれども、自然がこ
んなに豊かなのだというのを肌で感じてくる。そして、そこに生きる人たちの人間力、都会では感
じられない温かさを、生徒たちは感じてくるのです。都会というのは、人がいてもあいさつしなかつ
たり、隣に住んでいる人さえ、誰か知らない。離島とか地方に行くことによつてコミュニティーが今で
も存在しているのだと。お互いに助け合いながら社会というのは成り立っているのだという事も、自
然に学ぶ機会にはなっていると思います。

【山城さん】伊江島の山城と申します。今日の、能登局長のお話を聞きました、全国の離島にも該

当する、日本の離島教育の明るい未来が見えたなと感じました。それと同時に、今、太田先生がおっしゃったように、人間力を高めるのは離島や過疎地。過疎地になればなるほど、そういう、心の触れ合いあり、人として育つものを感じる。

私は10年間民泊を進めてきて、全国の子どもたちを島で受け入れして、それを体験的に感じております。それと合わせて、このICT教育が各離島でほんとに実現できるのでしたら面白いことができるなど、私は、今日のお話を聞いて感じておりました。そういうことで、ぜひ国のほうでも、これを実現できるように頑張っていたいただきたいと思います。以上です。

【司会】他にご質問等ございましたらお願いします。どうぞ。

【通事課長】竹富町役場の通事と申します。本日はどうも貴重なご講話、ありがとうございます。た。お話を伺っていて、特に9つの有人離島を抱える本町にとって、このような遠隔地における教育、その体制づくりというものが、非常に必須のものではないかと、われわれ、考えております。また、今回、事例の中にもございましたように、竹富町も一部参画をさせていただいて、環境の構築のほうを進めているところではあるのですが、まだまだ、何ていうのかな、十分なハード環境のほう

が正直整っていないのが現状でございます。まだまだ遅い電話回線を使ってインターネットをやっている地域でございますので。ただ、歴史的見て、これまで先生方がされてきた遠隔教育というのは、今のような、全てがそろった状態でやっていたものではないかと思えますので、ほんとに昔は音声だけだったとか、いろいろとあったかと思えます。ちよつとその辺の経験から、今回はこういう環境を整えればここまでできるといふのをご提起いただいたのですけれども、将来的に、われわれもそこにまで持っていきたいなと思っております。

その辺の、ご経験から来るものというか。最初はどこからスタートすればいいのかとか、まだまだこの辺まですぐ持っていくことができるよみたいなことがあれば、ちよつとお話しいただけないかなと思えますけども。

【能登局長】ご質問、ありがとうございます。与那国町で、今、実験をしておりますけども、これが実現できるようになったのは、やはり与那国にまで光ファイバーが通ったということが大きいのかなと思っております。ある程度、通信速度がないと、違和感のない授業っていうのはなかなか難しいとは思っております。ですので、そういった意味で、ちゃんとした通信回線を確保するというのが大きな前提になってくるのかなと思えます。ただ、それも、今は技術的には全然、そんな難しいことではな

くて、通信コストもどんどん下がっておりますので、これは時間がたてばおのずと整備されてくるものかなと思っております。

ただ、ソフトといいますか、ノウハウといいますか、こういったものは一朝一夕にはできません。これはいろんな実証実験などを進めながら、そういった蓄積をやっていくということだと思いますけれども、ただ同時に、こういう技術を使えばこれだけのことができますよということは、できるだけ多くの方に知っていただくということも大事かなと思います。行政の方ですとか、それから教育関係者だけではなくて、子どもさんですとか、それからお父さん、お母さんもそうです。そういった方にも、できるだけ多く、こういった事例などを知っていただくことが、機会として増えればいいのかなと思っております。

【大越校長】ICT環境整備費にお金がかかるのですが、文科省によるICT設備助成金があり、2分の1の補助が出るはずですが、本校もそれを利用して、環境整備をしました。今、当たり前前になっている、電子黒板を全教室に備え付けたり、無線LAN回線を全教室に整備したのも、補助金が出たおかげです。せつかくある補助金を利用すれば、割と早い時間で環境整備が整うと思います。

【司会】ありがとうございます。他に質問。あとお一人方、ご質問、お受けします。

【質問者】本日は貴重なご講演、ありがとうございます。本日いただいたお話は、基本的に離島という考え方だと思うのですが、一つ、沖縄県の中から見て離島っていうのは、当然、この石垣・八重山になります。日本の本土のほうから見た場合、沖縄もたぶん離島として捉えられて。高校がない所には、こういうICTを使った教育というのがありますが。例えば、本日ご紹介いただいた東大ネットアカデミーとか、どちらかというところがあつても高度な教育を受けられない環境に対するICTで高等教育をできるというものがあると思うのですが、離島に限らず、全県的に進められるようなことってというのはご検討されているのでしょうか。伺いたいと思います。

【能登局長】ありがとうございます。今、こういった東大ネットアカデミーを使った学習塾、遠隔学習塾については、これは離島を対象とした事業ということをやっております。おっしゃるとおり、可能性としては本島でもできるものだと思います。東大ネットアカデミーはコスト的にどれぐらいかといいますと、90分の授業が1コマ2万円弱なのです。例えば20人生徒がいますと、先ほど大越先生からありました、大体1人1,000円なのです。補助事業ということで、離島については事業

がなされておりますけれども、実は、コスト的に見たらそんなに大したことはないことです。これはニーズがあれば、どんどんどんどん広がっていくのかなと思っています。もちろん、先生の供給力も当然ありますけれども、ただ、こういったものが、どんどんどんどん、効果があるというのが見えてきておりますので、これからどんどん普及していく可能性はあるのかなと思っています。

【司会】ありがとうございます。

それでは、閉会の辞といたしまして、一般財団法人地球共生ゆいまーる理事、名護宏雄より申し上げます。

【名護理事】みなさん、長い間お疲れ様でした。3時から始まりましたが、島袋秀幸伊江村長の挨拶、沖縄総合事務局能登靖局長、桜美林大学名誉教授大越孝桜美林中学校・高等学校校長の講演がありました。本日は、離島役場関係者、離島町村の皆さんがわざわざ遠いところから、この講演会のためにお越し頂きました。ほんとうにありがとうございます。

地球共生ゆいまーる財団は、前回、前々回とシンポジウムを行っておりますが、前々回のシンポジウムでは先程紹介のありました、山城さんたちが行っている民泊の話で、大いに盛り上がりまし

た。今回は、またICTでどう離島の教育をするかという話で非常に熱を帯びていたのかなと思います。

民泊の話では、今でも民泊は非常にブームで、都会ではいろいろトラブルも起きております。前々回のシンポジウムのパネルディスカッションの結論は、伊江島の民泊は、人を育てたり地域を盛り上げたりということ、民泊そのものの良い面が非常に評価されているのに、都会ではトラブルの話題が多くて、沖縄発の民泊の取り組み方、やり方がむしろ日本の民泊の在り方を示しているのではないかと話がありました。

今日は、能登事務局長のICTの話でした。私もコンピュータ沖縄という会社をやっているのですが、我々の業界の中でも与那国町のようにITを活用して沖縄の小中学校の学力テストを全国並みにするにするとという事例、大変参考になりました。沖縄は大きな課題を抱えていながら、ICTを使ってこのような課題を克服できた実績がある。おそらく学校関係者や先生方と、情報を共有することにより、新しい学校教育の在り方のヒントになるのかなと思います。

民泊もICTを活用した教育も、離島の問題という事ではなくて、むしろ全国の過疎地の模範事例として、大きなヒントになっていくのかなということを、講演を聞きながら感じました。そういう点で、我々の身近な足元で、沖縄は民泊もあるいはICT教育もいろんな先進事例をやっています。そ

れをいかに広げていくかということが我々県民の課題かなと思います。

足元に全国規模の、先進事例が転がっているわけですから、県全体のICT活用事例を全国に発信していく、あるいは県民としても共有していくということが大事だと思います。

本日は2時間ほどではありましたが、有意義なこのイベントだったのかなと思います。皆さんのご協力、先生方の熱心なご講演、皆さんの参加によって大成功に終わることができました。本当にありがとうございます。（拍手）



どうなる・どうする あなたの町村【3】

「離島」における高校教育の可能性

—離島が日本の明日を拓く— 講演録

2018年6月発行

発行所©一般財団法人地球共生ゆいまーる

〒904-0031 沖縄県沖縄市上地 1-10-19

TEL/FAX 098-989-7937

E-mail yui-pica@nifty.com

文責:一般財団法人地球共生ゆいまーる事務局長 江原亜季